

インドネシア東部セラム島における多様な森の創出

1. 地域の概況

インドネシア東部マルク諸島セラム島(171,000km²)には、サゴ採取(サゴヤシからのデンプン採取)、イモ・バナナを主作物とする根栽畑作、林産物採取や狩猟によって生計を営んでいる人びとが暮らしている。この島中央部の内陸山地部には約1500人(2003年時点)の山地民が暮らしている。



図 インドネシア東部セラム島

2. 二次的自然の成り立ち

セラム島山地民は、移動耕作やアーボリカルチュア(有用樹木の栽培・半栽培)を通じた土地・植生へのはたらきかけを通じて、集約畑、粗放畑、フォレストガーデン、サゴヤシ林、休耕地、竹林、ダマール採取林など多様な生態環境を創り出している。特にフォレストガーデンやダマール採取林は、人為が加わることで創出・維持されたものだが、粗放に管理されており、一見したところ成熟した天然林と見分けがつかないような自然度の高い森である。

フォレストガーデンは、ドリアン、ランサッ、パラミツ、ミズレンブ(Syzygium aqueum)、などの果樹が栽植された(あるいは自生後に粗放管理された)樹園である。

フォレストガーデンは、森を刈り払って、そこに果樹を植えて造成することもあれば、コウモリの種子散布などで森に自生した稚樹を保護して創り出す場合もある。移植された実生や保護された幼樹は、ある程度の大きさに育つまで、下刈りやツル切りの保育がおこなわれることもあ

表 セラム島山地民による土地・植生の民俗分類と資源利用

土地類型(民俗名称)	主要な資源利用法
● 集約畑 (lela)	蔬菜・タバコ・豆類が植えられた比較的頻繁に除草が行われる畑。
● 粗放畑 (lawa aelo)	バナナとタロイモが混植された蘇峰管理される畑。
● フォレストガーデン (lawa aihua)	ドリアン、ランサ、パラミツ、レンブなどの果樹が植えられた樹園。
● サゴヤシ林 (soma)	湿地帯、小川のほとりなどに作られたサゴヤシの林。
● 新しいルカピ(lukapi holu)	小径木の生えた休耕地。
● 古いルカピ(lukapi mutuany)	中・大径木の生えた二次林
● 竹林 (awa hari など)	竹を植栽後、粗放管理することでできた竹の群生林。
● ダマール採取林 (kahupe hari)	実生・幼木を選択的に保護することで形成されたマニラコパールノギ(Agathis damara)の優占林。

(出典)笹岡正俊, 2007. 「インドネシア東部セラム島の在来農業と自然景観のかかわり: 「根栽畑」経営の小規模性と景観の多様性に着目して」『熱帯林業』 68: 57-67.



写真1 フォレストガーデン

るが、ある程度の大きさになると、半ば放置される。果実を採取するときに下草を刈ったり、幹に貼りついた蔓を切ったりする程度の働きかけしか行わなくなる。そのため、フォレストガーデンには、多数の野生樹木が入り込み、外見上は成熟した天然林と区別がつかない森となる。

一方、ダマール採取林は、自生する実生や幼木を人が選択的に保護した結果形成された、マニラコパールノキの優占林である。これも広大な天然林のなかに点在している。この樹木から採れる樹脂(kopal)は、1920年代ごろから1960年半ばごろまで、村の重要な現金収入源であった。市価がつかなくなっても、夜、灯りをとるために利用される他、かまどの焚きつけとして今も常用されている。そうした、有用性から、村びとは森のなかに自生するマニラコパールノキの実生や幼木を、下刈りや蔓切りなどを通じて世話をし続けてきた。こうした人による長年のはたらきかけの結果、森のなかには、胸高直径が1メートルを超えるようなマニラコパールノキの巨木が林立する立派な森ができています。



写真2 ダマール採取林

セラム島に生息する野生動物のなかには、程度の差はあれ、人為が働くことで創出・維持されている人為的攪乱環境を採餌場として利用し、遊動域の一部に組み込んでいるものが少なくない。例えば、絶滅危急種(VU)である野生オウム、オオバタン(*Cacatua moluccensis*)である。村人によると、オオバタンは、原生林・老齢二次林よりも、そのなかにパッチ状に分布するフォレストガーデンやダマール採取林によく出没するという。それは、この大型白色オウムが、ドリアン、ランサ、パラミツといった果樹の果実やマニラコパールノキの実を好物とするほか、マニラコパールノキの巨木にできた洞(ninahu)を格好の営巣場所としており、フォレストガーデンやダマール採取林を日常的に利用しているからである。つまり、オオバタンは、人が手を加え、自然環境や植物と相互作用することで生み出されたフォレストガーデンやダマール採取林といった森を、採餌や営巣の場として頻繁に利用する、いわば、熱帯の「里山」の鳥だと言えるものである。

3. 持続的利用・管理のための仕組み

表の土地類型のなかで、フォレストガーデン、サゴヤシ林、竹林、ダマール採取林といった森には、いずれも明確な保有権が成立しており、特定の管理者が存在する。その資源は非保有者に開かれた形で緩やかに共同利用されているが、樹木を伐採するなど土地・植生を大きく改変する行為は、管理者によってコントロールされている。また、マニラコパールノキについては、伐採したり樹皮を剥いで枯死させたりすることは厳禁されており、もしもそのような行為をすれば、皮膚がただれてしまう病気(nitu kamalo)に罹ると信じられている。

出典: 笹岡正俊. 2007. インドネシア東部セラム島の在来農業と自然景観のかかわり:「根栽畑」経営の小規模性と景観の多様性に着目して. 熱帯林業, 68: 57-67.